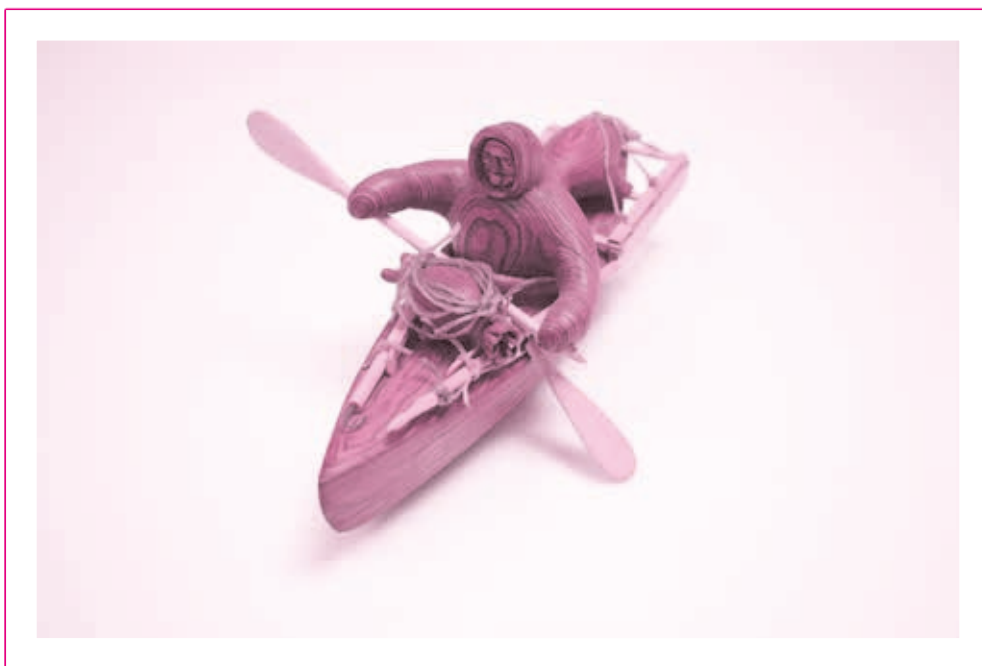




北方民族博物館だより

No.122



D30.16.3 カヤック模型 アラスカ／ホープ
25.5x19.0x9.0cm 1987年、R. "Bud" Johnson作 宇土康宣氏寄贈（2018年）

長年、アラスカでガイドを務めた寄贈者が1987年に友人であったホープ（Hope）在住の男性（R. "Bud" Johnson氏）から贈られたものである。R. "Bud" Johnson氏はアラスカ移住後、何十年も森の中で暮らしている男性で、一時期はノーム（Nome）近郊のエスキモーのコミュニティに居住し、現地のエスキモーから狩猟やものづくりを教わった。本資料は製作者である氏が自らの経験を活かし、カヤックを使った伝統的なアザラシ猟の様子を繊細に彫刻したものである。

目次 Contents

- 1 表紙 カヤック模型
- 2 第36回特別展 トナカイと暮らす タイガの遊牧民たち
- 3 講演会 トナカイとの暮らし モンゴルの森で
- 4 館長講座
シベリアのトナカイ遊牧民コリヤーク フィールドワークの25年と館所蔵の民族資料
／調査報告 奥尻島のオホーツク文化調査
- 5 ロビー展 アイヌ民族の現在1 ラポロアイヌネイション
- 6 INFORMATION

第36回特別展

トナカイと暮らす—タイガの遊牧民たち

2021.7.17(土)～10.17(日)

協力：NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ

今年の特別展では、シベリア東部から南部にかけてのタイガ（北方針葉樹林帯）地域で営まれてきたトナカイ遊牧文化を取り上げています。民族資料105点と写真や映像で、タイガに暮らす遊牧民たちのトナカイとの暮らしを紹介しています。ここではその概要をお知らせします。

トナカイは、北極を取り囲む地域に広く分布するシカ科の動物です。北方地域の先住民にとって、野生トナカイは狩りの獲物として重要な存在です。またユーラシア大陸では、家畜トナカイの遊牧がおこなわれてきました。

特別展の最初のコーナーでは、トナカイ遊牧文化の概要を紹介しています。トナカイ遊牧は、ツンドラ（凍原）型とタイガ型に大別されます。このうちタイガ型トナカイ遊牧は、おもにトナカイを狩りに行く際の乗り物として利用し、狩猟採集を生業とする生活様式です。タイガ型トナカイ遊牧は、トナカイの管理方法や使われる道具などによって、さらに「サヤン型」と「ツングース型」の二つに分けられます。この特別展では、サヤン型の遊牧民としてドゥハ、ツングース型の遊牧民としてエベンキ、エベン、ウイльтаを取り上げました。

「トナカイに乗った狩人たち」のコーナー

タイガ型トナカイ遊牧民にとって、狩りは肉や毛皮を手に入れるための重要な生業活動でした。トナカイに乗ることによって、徒歩に比べて広い範囲を速く移動することができるようになり、狩りの効率が高まったと考えられています。また森林資源に恵まれたタイガ地域では、移動式住居の支柱をはじめ、生活に必要なさまざまな道具の材料として樹木が活用されてきました。このコーナーでは、狩猟具や毛皮加工具、シラカバ樹皮製品などを展示しています。



狩猟具の展示

「トナカイと暮らす」のコーナー

トナカイと暮らすために欠かせないのが「放牧」です。放牧中のトナカイを見失わないため、また放牧の際にトナカイが遠くに行ってしまうように、トナカイの移動を制御するさまざまな工夫が懲らされてきました。

例えばトナカイの好物である塩を入れる専用の袋には鈴が付いているものがあります。袋を振ると鈴が鳴るので、トナカイはその音を聞くと寄ってくるようになるのです。

逆に放牧中のトナカイの移動を抑えるため、ドゥハはトナカイ2頭を紐でつなぎ、ペアの状態で放牧します。エベンキやエベン、ウイльтаは、トナカイの首から枝や丸太をぶら下げて放牧することがあります。

このコーナーでは、放牧を効率よくおこない、トナカイの移動を制御するための道具として、塩入れ袋、鈴、移動制御棒、投げ縄などを展示しています。投げ縄については、トナカイの皮紐を材料とする投げ縄の作り方も説明しています。



投げ縄の展示

「乗り物としてのトナカイ」のコーナー

タイガのトナカイ遊牧の特徴は、トナカイをウマと同じように乗り物として利用してきたことです。サヤン型では、モンゴルで使われるウマ用の鞍を小ぶりにしたような鞍を使っています。鞍をトナカイの背に載せ、片手に手綱、もう一方の手には杖を持ってトナカイを操縦します。ツングース型の鞍は幅が広く、「^{あぶみ}鐙」（鞍の両脇につるして足を踏みかける道具）はついていません。トナカイの前足の上（肩）のあたりに鞍を乗せ、人は脚を前に出すような形でその上に座ります。手綱はウマと同様ですが、「鐙」がないので脚はぶらぶらした状態になります。

トナカイの鞍はそれほど目を引く存在ではありませんが、当館のトナカイ鞍コレクションはおそらく日本最大規模です。このコーナーでは、そのコレクションのなかから、ドゥハ、エベンキ、エベン、ウイльтаのトナカイ騎乗用鞍や荷駄用鞍などを展示しています。

一方、トナカイはサンタクロースの橇を引く動物として知られていますが、トナカイに橇を引かせる文化は、タイガではツングース型トナカイ遊牧民に限られています。本展では、東シベリア型と呼ばれるウイльтаのトナカイ橇、同じく東シベリア型とチュクチ・コリヤーク型のトナカイ橇の模型を展示しています。



トナカイ毛皮製ブーツの展示

「素材としてのトナカイ」のコーナー

タイガ型トナカイ遊牧の特徴は、トナカイを生きたまま活用することです。しかし、何らかの事情でトナカイを屠畜した場合、その体は余すことなく活用されてきました。

トナカイの毛皮は断熱性に優れているため、広く防寒着や手袋、帽子などの素材として利用されてきました。毛足が短く耐久性が高い脚の毛皮は、ブーツなどに加工されてきました。これらのなかには、色の違う毛皮を組み合わせた美しい模様が施されたものもあります。このコーナーでは、さまざまな大きさや模様のブーツ、帽子、手袋、バッグ、壁掛けなどを展示しています。

毛皮以外の角や蹄、腱、骨なども利用されています。トナカイの角は、鞍や投げ縄の部品とされますが、近年は角で作った彫刻が土産物として販売されています。蹄は煮て接着剤の材料にされたり、色や形を活かして工芸品に加工されることもあります。トナカイの腱の細かい繊維を撚ったものは、縫い糸として使われてきました。

トナカイの肉だけでなく、内臓や骨髄、血、袋角（生え始めの柔らかい角）、そして乳も食用とされます。角は民間医療薬や健康食品の材料とされる場合もあります。乳はトナカイを生かしたまま利用できる食材ですが、特にタイガでは積極的に活用されてきました。ここでは、漢方薬として販売されているトナカイの角、トナカイ乳の保存容器などを展示しました。

トナカイは人に便利な移動手段をもたらしてくれるだけでなく、着るものや道具を作る材料、そして食べるものをも与えてくれる頼りになる存在です。しかし、トナカイと暮らすためには、トナカイにとって快適な環境—植生が豊かで、夏も涼しい場所、逆に言えば人里離れた、冬の寒さが厳しいところ—に人が入っていかなければなりません。人にとっては過酷な環境ですが、それでもトナカイと暮らす生活のなかに、今も伝統的な文化が息づいているのです。

7月31日には特別展解説講座を開催し、トナカイ遊牧文化の概要や展示資料の詳細について説明しました。参加者は少なめでしたが、特別展の展示内容について理解を深めていただけました。（学芸グループ 中田篤）

講演会

トナカイとの暮らし—モンゴルの森で

2021.7.17(土)

講師 西村幹也氏

(NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ・理事長)

特別展をより深く理解いただくため、講演会を開催しました。講師の西村さんは、20年以上にわたり、モンゴル北部に暮らすトナカイ遊牧民の生活を観察し続けてきました。この講演では、現地で知り合った人たちとのエピソードを中心にお話いただきました。

最初に、西村さんがもっとも長く交流してきたバヤラーさんの話題が紹介されました。バヤラーさん一家は移動式の家に暮らし、その地域でもっとも多くのトナカイを飼っていました。西村さんはいつも彼の家の近くに滞在し、兄弟のような付き合いをするまでになったそうです。ある時、持っていた食料をほぼ食べ尽くした西村さんは、肉なしの食事をしていました。それを知ったバヤラーさんは、「お前は俺の弟だろ？ だったらなぜ俺に肉をくれと言わないんだ？」と怒ったそうです。彼らは、トナカイを移動手段とし、野生動物を狩猟して生活してきました。彼らの食事に肉はなくてはならないものであり、獲物の肉は皆で分け合うものなのです。翌日、西村さんの元にはバヤラーさんから大きなシカの足が一本届けられたそうです。

また、バヤラーさんの息子ナランさんは射撃の名手で、リスの毛皮を傷めないように目を射貫くほどの腕前だそうです。近年、現地は野生動物保護のためとして狩猟が禁止されていますが、ナランさんは「狩りは動物を守ることにもつながる」と語ったそうです。都会からレジャー目的でやってくるハンターとは違い、彼らは現地の自然を熟知しています。彼らが狙うおもな獲物は、増えすぎると生態系のバランスを崩すシカなどの草食獣なのです。

他にも現地の人びととの交流を通じて知ったトナカイ遊牧民の伝統的な生業や価値観、その変化などについてお話いただきました。西村さんの軽妙な語り口に、参加者も楽しく耳を傾けている様子でした。（学芸グループ 中田篤）



西村幹也氏

館長講座

シベリアのトナカイ遊牧民コリヤーク フィールドワークの25年と館所蔵の民族資料

2021.8.8

講師 呉人 恵（当館館長）

4月に館長に着任して、初めての館長講座をおこないました。直前に北海道にまん延防止等重点措置が敷かれ、県をまたいで移動が制限されてしまったために、聴講される方々は博物館からパブリック・ビューイングで、私は一人富山からオンラインで参加という形での開催となりました。当館としては初めてのリモート講座となりました。

講座では、前半は私自身のこれまでのコリヤーク語の研究について、現地調査の跡をたどりつつ紹介しました。私は、コリヤーク語の文法を記述したいと思って現地調査を始めました。ところが、伝統的なトナカイ遊牧が営まれているツンドラの奥地に入っていくと、長時間の文法の聞き取り調査が難しいことを思い知らされることとなります。皆忙しく働いていて、私の退屈な調査につきあっている暇などないからです。

私は、やむを得ず文法調査はひとまず棚上げにして、コ



馴鹿の脛皮のなめし方を練習する筆者

リヤークの人たちの日常生活に寄り添い、彼らが自然環境、動植物、様々なモノなどにどのように向き合っているかを観察し、民俗語彙を集めるようになりました。

当館に収められているコリヤーク

民族資料もこうした調査の中で収集されたものです。

講座の後半では、このトナカイ遊牧地での調査の成果の一部をことばの側面から紹介しました。トナカイの蹄がその利用価値の高さから7種類もの部位名称を持つこと、その一つは彼らのトナカイ毛皮製住居の骨組みと同じ名称であること、そのことは、トナカイ解体の際に儀礼的に設置される、住居の骨組みを運ぶそり櫃こに蹄などが置かれることと無関係ではなさそうなこと等々。ことばの分析を通していかにコリヤークの動物資源観にアプローチできるかの一例をご紹介します。

アンケートでは、話に出てきたモノたちをいつか実際に見てみたいという嬉しい感想もいただきました。モノたちがその生活用具としての役割を終えてなお語りかけてくる豊かな物語を、できるかぎり皆様にご紹介していきたいです。（館長 呉人恵）

調査報告

奥尻島のオホーツク文化調査

2021. 7.5-7.9

担当 種石 悠（当館 学芸員）

今年度の考古資料の調査研究業務として、北海道南部、奥尻島のオホーツク文化調査に行きました。調査では、オホーツク文化遺跡である宮津遺跡と青苗砂丘遺跡の現地確認、そして、青苗砂丘遺跡出土資料の観察を行いました。訪れた遺跡を中心に、紹介したいと思います。



宮津遺跡と漁港

宮津遺跡は、奥尻島の東海岸にあります。遺跡のある弁天岬は、海岸段丘が浸食によって独立丘のようになっており、この頂部に弁天神社の社が建てられています。この神社の境内でオホーツク式土器が採集されたこと

から、オホーツク文化の遺跡であることがわかりました。ほかに、続縄文土器も採集されています。

宮津遺跡は岬の先端にあり、とても見晴らしのよい位置にあります。また北側は湾になっており、小さな漁港が造られています。漁を行い、また船を扱う上で、非常に便利な立地であると感じました。



青苗砂丘遺跡

青苗砂丘遺跡は、奥尻島の南端、青苗岬の東岸にある砂丘上の遺跡です。ここから、オホーツク文化期の竪穴住居跡とお墓が発見されました。遺跡のすぐ近くをワサビヤチ川が流

れ、目の前は青苗湾です。こちらも、オホーツク文化人たちの生活に適した立地です。

青苗砂丘遺跡から出た土器をみて、北海道北部の礼文島の土器に似ているという感想を持つ研究者もいます。私は礼文島のオホーツク式土器を多くみていますが、似ているという印象は持ちませんでした。あくまで、奥尻島で育まれた北海道南部独自のオホーツク文化だったと思います。

（学芸グループ 種石悠）

ロビー展 アイヌ民族の現在 1

ラポロアイヌネイション

主催：北海道立北方民族博物館、
ラポロアイヌネイション、浦幌町立博物館
会期：2021.6.22-7.4

ラポロアイヌネイションは北海道十勝地方の浦幌町で活動するアイヌ団体です。1970年に北海道ウタリ協会（現北海道アイヌ協会）の浦幌支部として浦幌アイヌ協会が組織され、2020年に現在の名称に変更されました。本展はラポロアイヌネイション、浦幌町立博物館、当館の共催により、ラポロアイヌネイションの活動を通じ、浦幌町におけるアイヌ民族の現在の活動を紹介しました。

本展ではまず浦幌町の地理と歴史について解説し、そこに暮らしてきた浦幌アイヌの歴史を解説しました。そして



現在のラポロアイヌネイションの会員がどのような日常を送っているかを、会員の多くが従事する漁業と、その合間を縫って行われているアイヌ文化伝承活動の資料から紹介しました。

その上で近年、ラポロアイヌネイションが特に注力してきた活動である①遺骨返還運動、②アメリカ先住民との交流、③丸木舟作り、④サケの特別採捕とアシリチェブノミの実施、⑤サケ漁業権確認訴訟を順に紹介し、展示の最後では⑥ラポロアイヌネイションから来館者へのメッセージ映像を上映しました。

近年、ラポロアイヌネイションは上述の先進的な活動で全国的に知られるようになりました。ラポロアイヌネイションは過去に研究者たちによって浦幌町内の墓地から持ち去られたアイヌ民族の遺骨の返還を求め、2014年から北海道大学、札幌医科大学、東京大学の順に提訴し、2020年までに、浦幌から持ち出された全ての遺骨の地域返還を実現しました。返還された遺骨は全て浦幌町内の墓地に再埋葬され、ラポロアイヌネイションは毎年、先祖供養である「イチャルパ」を実施しています。本展では遺骨返還の写真やイチャルパ開催のポスターに加え、副葬品によって、浦幌における遺骨問題を紹介しました。ラポロアイヌネイションは北海道大学から遺骨とともに返還された副葬品を再埋葬せず、浦幌町立博物館に寄贈し、保管／展示してもらうことを選択しました。これは副葬品を見てもらうことで、浦幌から先祖の遺骨が持ち去られたことを知ってもらい、過去を風化させないための選択でした。本展でもその意思を尊重し、副葬品を借用し展示させて頂きました。

近年、ラポロアイヌネイションは上述の先進的な活動で全国的に知られるようになりました。ラポロアイヌネイションは過去に研究者たちによって浦幌町内の墓地から持ち去られたアイヌ民族の遺骨の返還を求め、2014年から北海道大学、札幌医科大学、東京大学の順に提訴し、2020年までに、浦幌から持ち出された全ての遺骨の地域返還を実現しました。返還された遺骨は全て浦幌町内の墓地に再埋葬され、ラポロアイヌネイションは毎年、先祖供養である「イチャルパ」を実施しています。本展では遺骨返還の写真やイチャルパ開催のポスターに加え、副葬品によって、浦幌における遺骨問題を紹介しました。ラポロアイヌネイションは北海道大学から遺骨とともに返還された副葬品を再埋葬せず、浦幌町立博物館に寄贈し、保管／展示してもらうことを選択しました。これは副葬品を見てもらうことで、浦幌から先祖の遺骨が持ち去られたことを知ってもらい、過去を風化させないための選択でした。本展でもその意思を尊重し、副葬品を借用し展示させて頂きました。

2017年5月には会長の^{さしままさき}差間正樹氏と会員の^{さしまひろまさ}差間啓全氏がアメリカ、ワシントン州の先住民マカ・トライブとローワー・エルワ・クララム・トライブのもとを訪問し、文化交流を行いました。現地を訪問することで二人は、この二つの集団はアイヌ民族と同じく伝統的にサケ漁を行ってきた人々だったことを知りました。現地の先住民たちは、一度は州法によってサケ漁業権を奪われましたが、地道な復権運動によって最終的にサケ漁業権を取り戻し、現在はサケ漁業者としてだけでなくサケ資源を含む地域の環境保全についてもリーダー的な役割を果たしています。差間会長はアメリカ先住民のこうした姿に強く感銘を受けたと述べています。

アイヌ民族にとってサケは主食の一つでしたが、伝統的な河川での漁業は明治以降、段階的に禁止され、現在も河川でサケを捕ることは禁止されています。サケ漁の禁止と共にサケ漁に伴っていた、遡上するサケを迎え、豊漁を祈願する「アシリチェブノミ」という儀式も衰退しました。アシリチェブノミは1982年に札幌で復興され、1986年からは伝統儀式などのためなら北海道知事の許可を得て、少量のサケを特別に捕獲することが認められるようになりました。生業活動としてのサケ漁は現在も禁止されています。

2020年、ラポロアイヌネイションも初めてサケの特別採捕とアシリチェブノミを実施しました。6月には特別採捕で用いる伝統的な丸木舟を復元し、9月20日に初めてのサケを捕獲した上でアシリチェブノミを実施しました。



これとは別に、2020年8月には、先祖がサケ漁を行っていた浦幌十勝川（かつての十勝川本流）において、その子孫たちによって組織されている

特別採捕用の旗 ラポロアイヌネイションが、サケを捕獲する権利を受け継いでいるということを確認するために国と北海道を提訴しました。この裁判は現在も係争中ですが、日本で初めて集団としての先住権が争点となっている訴訟として注目を集めています。本展ではラポロアイヌネイションのこうした活動を、アメリカ先住民から会員に贈られた資料、特別採捕の際に掲示する旗、裁判訴状の全文、写真や儀式の映像から紹介しました。

本展は、新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言により会期が変更となり、関連事業の一部も延期となりましたが、多くの熱心な来館者に恵まれました。また6月27日には共同企画者である浦幌町立博物館の持田誠学芸員をスペシャルゲストにお迎えし、共同での展示解説会を実施しました。共に展示を作ってくださったラポロアイヌネイション、浦幌町立博物館を始め、展示に協力頂いた皆さんに心よりお礼を申し上げます。

(学芸グループ 野口泰弥)

ロビー展 写真で振り返る日本のアラスカ調査

岡田宏明当館第2代館長、岡田淳子当館第4代館長は1960年に始まった日本のアラスカ調査に約40年に渡り携わり、日本におけるアラスカの考古学・人類学的研究を切り開いたパイオニアとして知られています。本展は岡田夫妻が長年に渡り撮影した調査写真から日本のアラスカ調査の足跡をたどります。

■会期：2021年10月30日(土)～12月12日(日)

■会場：北海道立北方民族博物館ロビー

■主催：北海道立北方民族博物館

■観覧料：無料

■関連事業：

講座 日本調査隊のアラスカ考古学への寄与

講師 岡田淳子氏(当館第4代館長)

2021年10月31日(日) 10:00～12:00



ホットスプリング遺跡遠景

第35回 北方民族文化シンポジウム 網走 大林太良・学問と北方文化研究—大林太良先生没後20年記念シンポジウム—

幅広い知識を基盤に神話、東アジアや日本、そして北方地域の文化研究を進めてきた北方民族博物館初代館長・大林太良先生(おおばやし・たりょう 1929-2001)の業績を振り返り、今後の北方文化研究の方向性と展開を検討します。

■日程：2021年10月16日(土)・17日(日)各日9:00～16:00

■開催方法：原則としてZoomウェビナーによるオンライン開催【参加無料】(定員：先着100名)※事前のお申し込みが必要です。詳細は参加申し込み(下記)をご覧ください。

■発表者・座長：

クライナー ヨーゼフ氏(ボン大学 名誉教授)、石井正己氏(東京学芸大学 教授)、横山廣子氏(国立民族学博物館 名誉教授)、松村一男氏(和光大学 教授)、シンジルト氏(熊本大学 教授)、荻原眞子氏(千葉大学 名誉教授)、佐々木史郎氏(国立アイヌ民族博物館 館長)、岸上伸啓氏(人間文化研究機構 理事)、高倉浩樹氏(東北大学東北アジア研究センター 教授)、加藤博文氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授)、吉田睦氏(千葉大学 教授)、呉人恵(北海道立北方民族博物館 館長)

■主催：(一財)北方文化振興協会、北海道立北方民族博物館

■参加申し込み

北方民族博物館公式サイト 第35回シンポジウムページ(<http://hoppohm.org/symposium35.html>)から、フォームに必要事項を記入して登録してください。

◇申し込み締切 2021年10月8日(金)正午まで

◇登録後、自動返信メールにてシンポジウム参加のためのリンクをお知らせします。

INFORMATION

行事報告

◆6月26日(土)上映会「北方民族博物館シアター夏」(講師：野口泰弥学芸員)を開催しました。

◆7月3日(土)はくぶつかんクラブ「皮でつくるタオル掛け」(講師：石原生久代解説員、菅原章子解説員)を実施しました。



じょうずに作れたね!

◆7月10日(土)はくぶつかんクラブ「フィンランドのアウトドアゲームモルックで遊ぼう」(講師：菅原章子解説員、塩谷舞解説員)を開催しました。



えいっ!

◆7月24日(土)はくぶつかんクラブ「シラカバ皮のウォールポケット」(講師：平栗美紅解説員、菅原章子解説員)を実施しました。



かっこよく作れたね!

◆8月7日(土)はくぶつかんクラブ「ビーズ織りでつくるキーホルダー」(講師：平栗美紅解説員、石原生久代解説員)を実施しました。



むずかしかったかな?

行事の延期

◆6月13日(日)講座「ラポロアイヌネーションのこれまでとこれから」講師：ラポロアイヌネーション会員、持田誠氏(浦幌町立博物館学芸員)※日程は決まり次第お知らせします。

年報の発行

◆令和2年度の年報を発行しました。

北方民族博物館だより No.122

令和3年(2021年)9月25日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
<http://hoppohm.org>
指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会